

学校だより 夏休み号 しもながや



横浜市立下永谷小学校

子どもたちの気付きが広がる学び ～ 多層指導モデルMIMの取組を通して ～

学校長 外山 芳

横浜市では、「横浜教育ビジョン 2030」をもとに第5期教育振興基本計画を進めています。その柱の一つである「全ての子どもの可能性を広げる学びの推進」では、学習の基礎となる“読み”と“さんすう”の力を確実に育てることが重視されています。その具体的な取り組みとして、市内すべての小学校で、「多層指導モデル MIM」（以下、MIM）を導入し、一人ひとりに応じた効果的な支援を行う体制を整えています。

MIM は、明治学院大学 教授 海津亜希子先生が開発されました。初期の「読み」の指導における最大の難関である「特殊音節」に焦点を当て、文字や語句を正しく読んだり、書いたり、なめらかに読んだりすることをめざす指導モデルです。また、MIM では、視覚化（文字や音のまとまりを目で見えて理解する）や動作化（音の変化を体の動きで感じ取る）を取り入れ、子どもたちが感覚的に理解しやすい学びを実現しています。月1回のアセスメントにより、読みの力を客観的に把握し、指導の改善につなげられるのも MIM の特徴の一つです。

横浜市の施策をまずは低学年で進めたいと考え、先日、私自身、1年生の全クラス（個別支援学級も含む）で MIM の授業を行いました。今回は、読みの基礎となる 促音（小さい「つ」）と長音（「ー」）を取り上げました。授業では、文字を視覚的に表したり、（例：「ねこ」→「●●」、ねっこ→「●●●」）促音の「つまる感じ」を手の動きで表したり、長音の「伸ばす感じ」を腕をゆっくり伸ばす動作で表したりしながら、音の違いを見て、体で感じ取る活動を行いました。そして、授業が後半になると、子どもたちは、「（この言葉は）“つまる感じ”がするから小さい『つ』が必要なんだ」「“のばす感じ”がする言葉には『あ・い・う・え・お』の音が入るよ」と、自分の気付きを言葉にしていました。そして、自分たちで 促音や長音を含む言葉を考える活動にも主体的に取り組んでいました。「ろけっと」「きって」「おばあさん」「おじいさん」など、生活の中で出会う言葉を次々と挙げながら、文字と音のつながりを楽しむ姿が見られました。友だち同士で「この言葉には小さい「つ」が入るよ」「この言葉は伸びるよ」と確かめ合う場面もあり、教室には自然な対話が広がっていました。自分で見つけた言葉を紙に書き、読みながら、体を動かしながら確かめる子どもたちの表情はとも生き生きとしており、学びが自分ごとになっていることを強く感じました。こうした主体的な気付きや、友だちとの対話を通じた学びは、まさに「深い学び」へとつながる大切なプロセスです。MIM の取組を通して、子どもたちの気付きが広がる瞬間を目の当たりにし、教室の中で生まれる対話や発見が、学びを豊かにしていくことを強く感じました。

これからも、子ども自身が気づき、考え、可能性を広げる学びを学校全体で進めていきたいと思っています。



1年生での授業の様子。子どもたちは目を輝かせながら言葉を考えたり、伝えたりしています。